皇儲来駕之記

千歳支場

ご来道中の皇太子殿下は7月9日，本道最後の日程を千歳支場にお立よりになり，支場職員の心からのお迎えの中で鮭鱒魚族に対しての強い関心を示された。以下その随行記。

普段のままでお迎えというものの場創始以来初の栄譽を担つた同場では月余におよぶ準備期間をもち，さしもの広い構内も塵一つ止めぬまでに清掃された。その午後，今はただお着きを待つばかりとなつた前庭には道，警察などの関係連絡員がしきりと往来しだし，構内にはようやく緊張した空気が漲りはじめた。

午後の陽射しが緑に一そうの深みをそえる。深緑をついて出る千歳川のせんかんとした流れだけが無限の動きを伝える。静かな清々しい空気のなかにそこここに佇立する人々の上に徐々に興奮と緊張の空気が流れてゆく。

3時15分，予定より大分遅れて，車の列が対岸の道路に出た。お車は第1孵化室の前にぴたりと止り，先導者の荒井場長がまずご挨拶を申上げる。ここで山崎千歳市長のご挨拶をも受け，ただちに場長のご先導によつて場内を一巡された。

コースは孵化室前の小川に設けられた捕魚車の模型にはじまり，室内に入つて孵化事業の年表，場の配置図，33年度の事業計画表，マレツプとアイヌがこれを使う写真がかげられて，ここまでを場長がご説明申上げた。

ついで石川嘉技官が当り，次の展示品についてご説明を担当した。

網ウライ模型・採卵台および器具・輸送箱・孵化盆・孵化槽・立体式孵化器・木村式孵化器・捕獲から採卵までの写真・天然産卵写真・消毒管・マラカイトグリーン・鮭発生標本・稚魚輸送舟写真・鮭卵発生図・標識放流試験結果地図・標識実験・鮭鱒洄游図

これら展示の説明について殿下は，しばしば質問され，マラカイト消毒について，卵の毒物に対する抵抗，消毒のし方，所要時間などについて種々おたずねになり，また稚魚については放流期の大きさを質問されたほか次のようなおたずねがあつた。

「運搬するのには卵のときと，稚魚になつてからとどちらがいいのですか」

「稚魚には水質の変化によつてどのような影響がありますか」

「標識には腹びれを切つても差支えありませんか」

「標識魚はどの程度もどつて来ますか」

この後，柴田支場長が引継ぎ，次のような展示品によつてご説明申上げた。

鱗の型・鱗の染色・孵化事業の障害図・人工孵化を行う主要魚種表・本道に来游する鮭鱒類図・千歳川でとれた魚族の標本。

水槽3ヶ—その収容魚類—

さけ・やまべ・あめます・かわます・おしよろこま・ひめます・にじます各稚魚。

やまべ・かわます・にじます・あめます・おしよろこま・うぐい・はなかじか・各成魚。

雑魚類・えぞぼとけ・はなやつめ・ふくどじよう・うきごり・きたのとみよ・ふな・やちうぐい・よしのぼり・どじよう・すじえび・もくずがに・ざりがに・かわしんじゆがい。

プランクトン・ひめます稚魚

以上の部分は主として魚種をならべたために最もご質問も多かつた。まず，ときしらずについて聞かれ，異状鱗をつけた鮭にも興味をひかれたご様子だつたが，あめますの分布，いわなの有無，あめますといわなは同じ属かどうか，等々特に分類についてご関心を示されていた。また，

「あきあじとかときしらずとかしろざけとかいうのは北海道だけのバラエテイですか」

といつたご質問によつてもうかがわれるが，本道での俗称によつて容易にご理解しにくいご様子にみえた。ご来道以来俗称は屢々お耳に入つていたに違いないし，それらを整理して分類されるにはこのような機会がよろしかつたようにうかがわれた。

この後，虹鱒の飼育池に向われ，林中技師がご説明を申上げ，投餌してご覧に入れた。虹鱒については採卵による親魚の死亡率がどのぐらいかをご質問された。

三尺余の「はんざき」は構内の中央部まで移しておいてご覧にいれたが，これには興味がなさそうに見受けられた。

巡路は虹鱒の飼育池の傍を最奥部まで行き，水源をみて戻られたが，途中特に分類上の質問が続けられた。あめます，おしよろこま，いわな，かわますなどについてで，最初はこれらの形態上の比較でお答えしていたが，池から魚をあげてみても，どうも理解しにくいようで，柴田支場長から学名でご説明申上げると，理解されたご様子だつた。わずかの間うなづきながら malma, fontinalis. と1つずつ確められるように反問されてお気持がすつきりしたように見受けられた。

帰途は庁舎の裏にならんだ近所の人たちの万歳に応えられてすぐ車に乗られた。時に4時55分で，予定を40分過ぎていた。

コースが最終のせいか，予定時間は私たちが気にしていただけで周囲の人たちは殿下のお気のすむようにすすめられ，思いがけなく長い時間を構内にすごされた。お迎えする職員にとつてまつたくご健康そうな殿下を支場にお迎えし，身近かに接する時間の持てたことは支場職員あげての感激であり，また，殿下のご興味が決して通り一辺のものではなかつただけにその感激も一入強かつた。全場の光栄を代表した一日である。　（秋庭記）

同行メモ

○柴田支場長ご説明のころ，田中知事の曰く「魚類には非常にご関心があるからご説明も適当にしないと……」しかし，といつても説明者に耳うちするわけにはゆかない。

○構内で「やまべの養殖は何故やらないのですか」とご質問，場長は「現在産業的見地からやまべの親である海産桜鱒の増殖を目的としており，特にやまべとしての池中養殖は行つておらず全部河川に放流しております。しかし雄は相当河川に残りますので釣人の楽みの一つになつております」と述べましたところ殿下にはやまべそのものをご考えのご様子で「だつてやまべは美味しいでしよう」といわれ些かつまつた様子，殿下には定めし奥地で新鮮なやまべを味われたのでしよう。またoncorhynchus系統の鮭は産卵後斃死するので，産卵後も斃死しない鮭をお考えになられたことか，「大西洋の鮭（Salmo Salar）を移殖したらどうか，また北海道ではかわ鱒の養殖はしていないか」等のご質問がありこの度の行啓には魚類学の参考書をお持ちになられたとか，そのご熱心さとご識見の深さに恐れ入つた次第である。

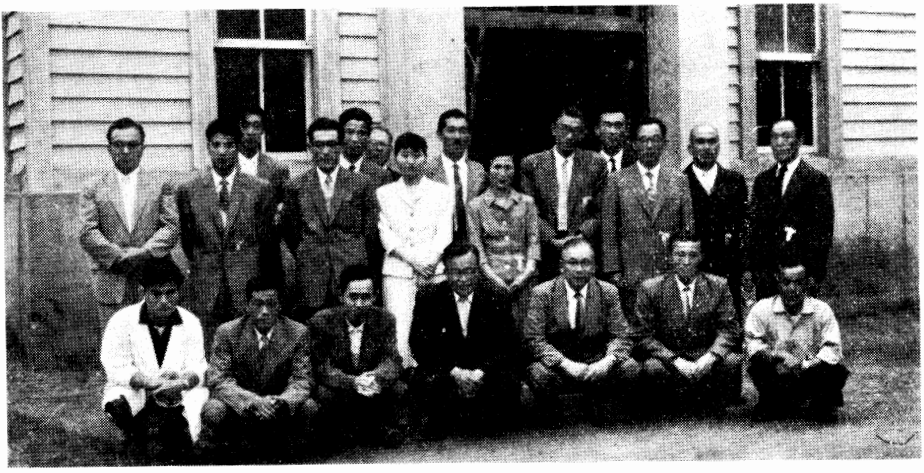
○殿下はオシヨロコマをオシヨロコといわれる。そうしたいい方は矢張り専門家的であり，決してつけ焼刃ではない。

○歩きながらではあつたが，虹鱒の採卵による死亡率を聞かれた際，林中技師は1割位と答えたが，その後がふるつている「冷いので手がかじれて……」この言葉は果してお分りになつたかどうか。

○殿下は確かに余り笑顔は見せない。また，言葉の数も少いが，しかし，いわれる時は自然に思つたように話される。私たちが従来潜在的に感じていたような皇室に対する差といつたものは話されるのを聞くとまつたく感じられなくなる。少し早口ではあるが，すらすらと考えていることをのべられる。

○カメラ，マイクには意識的になられるようである。もつとも私たちでさえ，あのように囲まれると反発を感ずるから，神経的に大変だろうと推察される。周囲も殿下のお気持も考え，そうした数を制限するような方法が必要と思う。

些か考えさせられた次第。　　—鉄--



奉迎した人々
前列（左から）日景，大久保，秋庭，柴田，荒井，遠藤，棚田
後列（左から）林中，倉橋，登石，石川，千葉，佐藤，千葉，広重，日景，阿部，堀
会田，岡本，管原